

**全国在宅療養支援診療所連絡会 第3回全国大会 プログラム別詳細**

<b>内容</b>	パネルディスカッション
<b>タイトル</b>	東京都の目指す医療・介護連携のNEXT STEP
<b>日時</b>	平成28年3月12日 16:00-17:50
<b>会場</b>	第2会場(503)
<b>座長</b>	西田伸一(調布市医師会副会長) 伊藤 文子(東京訪問看護ステーション協議会)
<b>演者</b>	渡辺 象(東京都医師会理事) 廣岡幹子(東京都看護協会常務理事) 大木一正(東京都薬剤師会副会長) 羽石芳恵(野口株式会社介護ショップハーティケア/主任介護専門員)
<b>企画趣旨・概要</b>	<p>「医療と介護の連携構築が醸成されたので、さあ、次のステップへ」となるべきところだが、連携が叫ばれて久しいにも拘らずあまり進歩がない地域も多いのではないだろうか。調布市医師会におけるアンケート調査において「医療と介護の連携の強化が必要か」という問いに対し、「必要」と回答した医師会員は2009年65%、2015年62%であり、全体としての意識変化がない。また、「サービス担当者会議への出席」について「できるだけ出席する」との回答が2009年26%であったが、2015年は12%であり、「出席しない」とする医療機関が27%(2009年)から35%(2016年)に増えている。当然さまざまな取り組みを行っているにも拘らず、である。我が国では医療と介護全ての職種が多くの場合別事業所で異なる制度の下に動いているため、日頃の繋がりが弱く、「連携の強化」がことさらに強調されるが、在宅の現場では忙殺され連携のための時間を捻出するのも難しい。現場任せでは進歩がない。敷居の高さは変わらないし相互理解も十分には深まっていない。連携しなくても何となく場当たりに物事を解決し、それについての十分なアセスメントが行われていないことも多いのではないだろうか。連携レベルの高い事例については地域ケア会議等で十分に研究しデータ化する必要がある。ICTの活用も期待され、現行のチャット機能を利用した医療・介護用SNSは介護職と医療者の距離を短くする可能性もあるが、これもツールの一つにすぎない。もっと根本的な解決が望まれる。如何に規範的統合が図れるか、について真剣に考えなければ次のステップへは進めない。</p>

(敬称略)